

日本気象学会第19期役員選挙告示

現在の役員は、昭和51年5月で2年の任期が満了となりますので、定款に従い次の要領で次期役員選挙を行います。

1. 選出する役員

理事 27名

監事 2名

2. 立候補および候補者推薦の届出

イ. 候補者の資格

昭和51年4月1日現在の通常会員

ロ. 届出方法

立候補する者および候補者を推薦する者は次の書類を付し、選挙管理委員会に届ける（郵送でもよい。）

- i) 候補者氏名、生年月日、所属機関、卒業学校名と卒業年次、種類別（理事、監事の別）
- ii) 候補者を推薦する場合は候補者の承諾書
- iii) 候補者の所信、とくに気象学会が当面していると思われる重要問題について具体的な考え方を400字以内にまとめたもの。

ハ. 届出締切

昭和51年4月22日までに選挙管理委員会に必着のこと。

ニ. 宛名

東京都千代田区大手町1-3-4 気象庁海洋気象部海洋課気付 日本気象学会選挙管理委員会

ホ. 候補者の資格審査

選挙管理委員会は前項に従って届出された立候補者および推薦候補者の資格審査を昭和51年4月24日に行ない、天気5月号に公示します。

3. 投票

イ. 有権者資格

昭和51年4月1日現在の通常会員

ロ. 候補者名簿および投票用紙

昭和51年5月下旬にこれらを送付しますから、6月15日までに到着しないときには、直ちに選挙管理委員会に申出してください。

ハ. 投票期日

昭和51年7月2日までに選挙管理委員会に必着のこと。

ニ. 投票方法

理事、監事別に連記無記名文書投票（方法の詳細は投票用紙と共に送ります。）

4. 開票および結果の告示

イ. 開票期日

開票は昭和51年7月3日気象庁内で行ないます。

会員はこの開票に立ち合うことができます。

ロ. 開票結果の告示

開票結果は当日発表し、かつ、天気7月号に公示します。

昭和51年1月1日

日本気象学会選挙管理委員会

東京都千代田区大手町1-3-4 気象庁海洋気象部 海洋課内 (Tel. 03-212-834 内線400)

(委員長) 安井 正

(委員) 小林隆久, 土田武雄, 西山勝暢, 宮園実康, 吉崎正憲

「付記」

定款第14条（抜粋）

理事および監事は、次に定めるところに従い、通常会員のうちから通常会員の無記名投票によって選挙する。

1. 理事は、細則に定める地区毎の定数を全国の通常会員が選挙する。

2. 監事は通常会員の互選で定める。

細則第7条

1. 各地区の理事の定数は、各地区の会員数に応じ、次のとおりとする。ただし関東地区については、この法人の事務の円滑な運営をはかるための定数を次のとおり加算する。

北海道地区（北海道）……………2名

東北地区（宮城県、岩手県、青森県、秋田県、山形県、福島県）……………2名

関東地区（東京都、神奈川県、千葉県、茨城県、埼玉県、群馬県、栃木県、新潟県、富山県、石川県、福井県、長野県、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重

- 県) ……………10名加算分 5名
 関西地区(大阪府, 京都府, 滋賀県, 和歌山県,
 奈良県, 兵庫県, 鳥取県, 島根県, 岡
 山県, 広島県, 香川県, 愛媛県, 徳島
 県, 高知県) …………… 4名
 九州地区(山口県, 福岡県, 佐賀県, 長崎県,
 大分県, 熊本県, 宮崎県, 鹿児島県)
 …………… 3名
 沖縄地区(沖縄県) …………… 1名
2. 監事は通常会員の中から2名互選される。

3. 通常会員は, 理事および監事に立候補することができる。
4. 他の通常会員によって書面により理事および監事に推薦され, かつそれを承認した通常会員は推薦候補となることができる。
5. 理事および監事は, 立候補者および推薦者以外の通常会員からも選挙される。
6. 理事および監事の選挙は, それぞれ種類別に連記する無記名文書投票とする。

==== 関西支部だより ====

——中国地区講演会集中豪雨について——

広島地方気象台では昭和50年10月28日9時30分から12時まで気象研究所の二宮洗三氏を迎えて表題の講演会を開催した。関係者約50人が聴講して盛会であった。主として梅雨前線帯の豪雨について話されたが, 紙面の都合で, 興味ある事項だけを取り上げて列記する。

1. 梅雨前線を維持している水蒸気は, その水蒸気流束の東西成分は発散となっており, この発散を補う以上の水蒸気輸送による南北方向の収束によって, 特に南からの強い流入によって維持されており, 水蒸気の流れは中国大陸などからでなく, 小笠原高気圧の縁を回る下層の南西風によって形成されている。

2. 900~600mb に現われる下層ジェットのやや北側に集中した擾乱のエネルギーがあって, ジェット軸の北側200km の巾のなかで豪雨が多発している。つまり, 大まかに言えば, 下層ジェットの北側で上層ジェットの南側の域内で大雨が発生することが多い。しかし, 擾乱系の南側で下層ジェットを見つけた場合, それが前線帯の一般的な性質を表わしている下層ジェットであるのか, 前線帯と重なっている擾乱に伴う局所的な下層ジェットであるのか識別する必要がある。

3. 下層ジェットを中心とした循環場は, 下層ジェットの軸に直角な垂直断面を考えた場合, 下層ジェットを境にして, 下層では北側で上昇流(湿潤), 南側で下降流(乾燥)となっており, 上層ではこの逆の循環が認め

られる。

4. 中間規模擾乱においては, 湿潤域の上層300~500mb に温暖域が形成される。このことは, 下層の収束によって積雲対流が盛になり, このため上層では対流昇温によって温暖化されるためである。また, この脊の高い積雲対流が現われる場合は, 上層の温度場に伴う風のシャー, 特に200~400mb の風のシャーに注目することは降水現象に対応した現象として大切である。

なお, 擾乱が通過した直後に, 下層では昇温が見られるが, これは後面の乾燥域における断熱下降流による昇温であって, それが終ってから本来の寒気による温度下降がみられる。

5. 総観規模の低気圧に伴う収束域におけるエコー分布は, メソスケールの集中を示しており, 何本かのエコーバンドが前線を形成しているとみるべきであって, 特定のエコーバンドを前線と考えるような, 総観解析における前線の概念をメソスケール天気図(例えばレーダーエコー図)に持ちこんではいけない。

6. 中間規模あるいは中規模擾乱におけるエコークラスターから対象とする現象を抽出するには, その現象の性格と観測網の密度, 測器の精度や分解能を考慮して, 適当なフィルターをかけて大きな擾乱を除けば, 総観場では見えなかった擾乱が解析出来る。